

7. 縊岩

これは“くくり岩”と読む。語感はあまり良くない。何故ならば、この”縊”の字は、糸”と“益”の組み合わせからなり、後者は音符でエキ→エイで、これには“しめる”の意味があることから、全体で“ひもで首をしめる、さらには、ひもでしめ殺す”といった意味になるからである。どうしてこのような疎ましい語感の地名が東京都発行の地図に載っているのだろうか？これが今回の話題である。

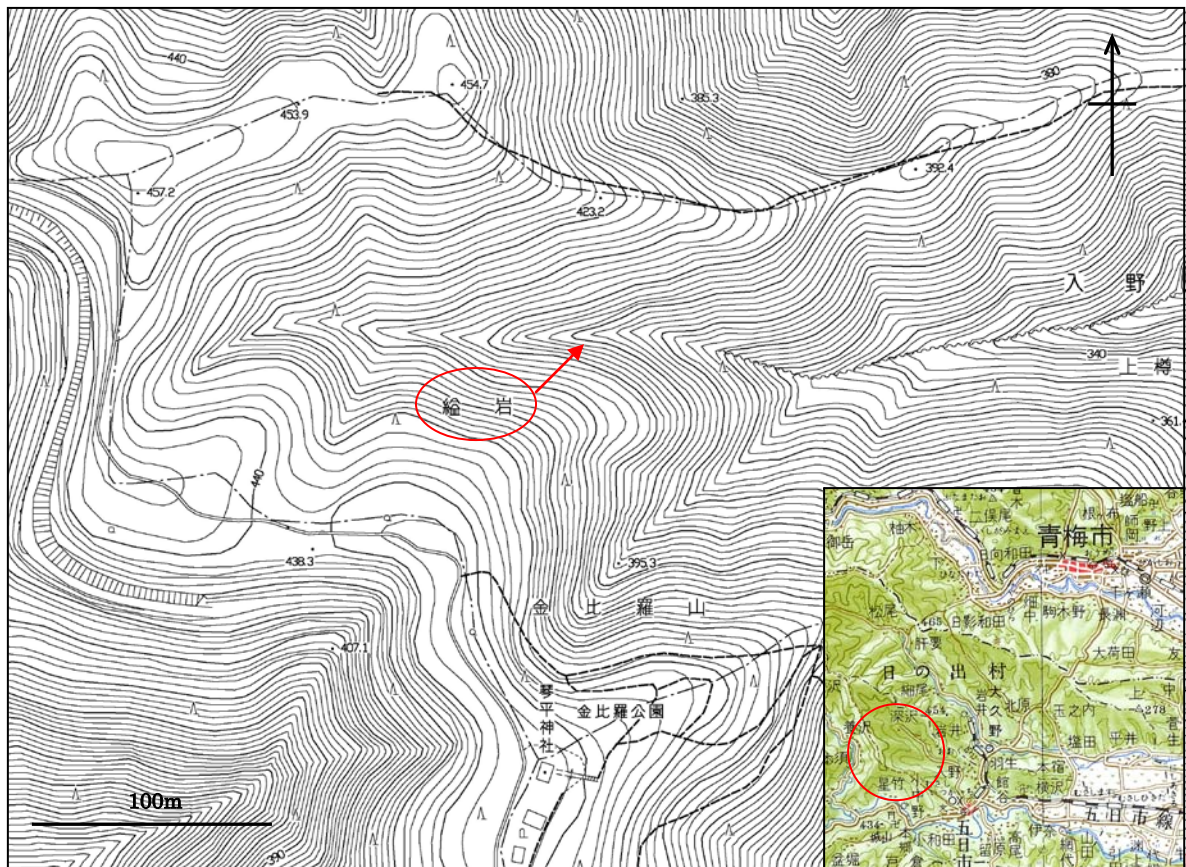


図1 五日市樽沢の地形

出典：東京都2,500デジタルマップ（→印は巨石の位置）

さて、JR五日市線の終点、武蔵五日市駅の裏山といった感じのところに“樽沢”という小さな溪流がある。これは図1のように、東西に細長い谷で、その東端は秋川支流の深沢に合流する。共に典型的なV字型の溪流で、流域の規模が小さいわりに峻嶒な谷地形をなしている。地層は白亜紀の砂岩、頁岩の互層からなり、走向は西北—東南または西北西—東南東で、多くは高角度で北に傾斜している。

このあたりの森林は殆どが、スギ、ヒノキの人工林からなるが、林業の衰退から、最近では手入れが殆どなされず、いわゆる“放置林”となっているところが多い。昼なお暗

く、倒木がいたるところに転がっていたり、背丈をはるかに超える篠竹が生い茂っていたりして、山の中を歩き回るといことは、普通にはまず不可能といつてよい。

このようなところで、水文観測が行われた。それは、秋川流域の放置林が近い将来、東京都によって、一律にその3割が間伐される予定だと聞き、そのことによって、土壌水分、蒸発散、流域流出などの水文現象がどのように変化するか、を追跡するためである。

研究は「とうきゅう環境浄化財団」の助成によって3年間ほど進められたが、その話をここでする訳ではない。その研究の過程で実感した“地名に隠された自然の姿”といったものについて触れてみたかっただけである。本来の研究テーマである流域水文の話は別の機会にまわす。

筆者が地元の方に案内されて、この谷に入ったとき、まず気になったのは、この地名である。その名の由来は知らないという。深く抉られた薄暗い谷中を登ってゆくと、谷を塞ぐようにして、巨石がそそり立っている(写真1)。遠巻きしてこの巨石の上に立つと、やはり何らかのいわく因縁がありそうだと、考えるより先に、体がそれを感じる。



その後、観測機器の設置や観測作業のために、地元の方々にお願いして山道や丸木橋がつくられたが、当初の昼なお暗い状況は、その後伐採されるまでかわらないまま、この場所へ5年間に亘って、雨や雪の日に拘わらず、毎週土曜日には欠かさず通いとおした。つい数年前までのことである。

山中でイノシシには何度も遭遇して度肝を抜かされたが、それよりもこの縊岩を通り抜ける時がいちばん気味悪かった。この地名から連想されるものが頭から離れなかったからである。

だいぶ前置きが長くなってしまったが、本題に入ろう。

写真1 五日市樽沢、谷底からの高さ約7mの縊岩

(伐採によって日が差すようになったが、当初は全体が放置林に包まれていた)

図2は下流(東側)からみた樽沢の立体図である。この図でまず注目される点は丸みのある稜線部と、これを深く挟むV字型の谷の組み合わせであり、またその谷中に幾つかの遷急点が見られることである。これらの遷急点のうち、最も顕著なのが、縊岩が位置する場所(写真2)である。ここでは上流側の緩やかな谷(写真3)と、下流側の典型的なV字谷(写真4)の対比を目にすることが出来る。

もう読者は筆者が何を言おうとしているか、お分かりのことと思う。

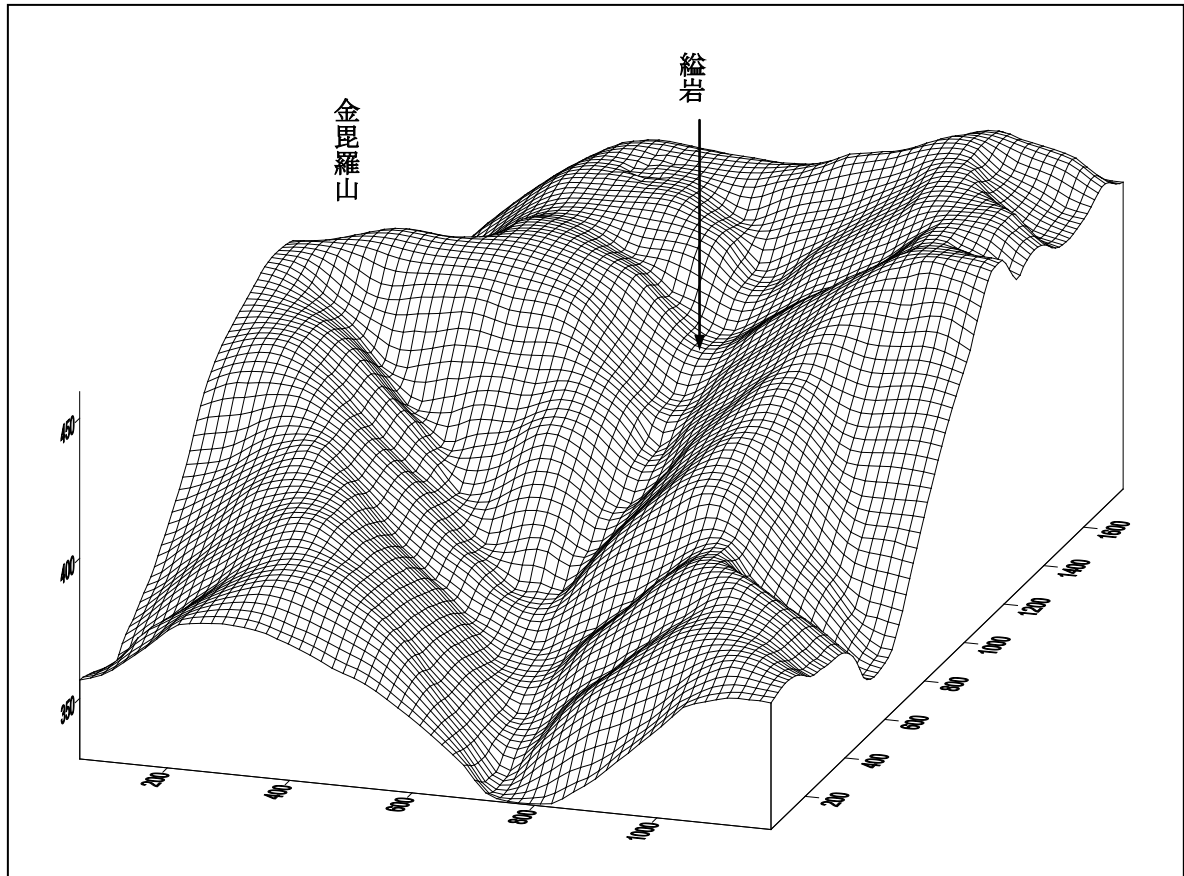


図2 樽沢の谷と稜線

(谷地形を誇張するため、縦横比を大きくとっている)

人間で言えば、この位置が、ちょうど頸部に当たり、たしかに巨石は谷筋を締め付けるかたちになっている。このことが、昔の人をしてこのように呼ばせた理由ではないかと解釈し、一人納得してから、気味悪さは多少薄らいだ気がする。しかし、この巨石は地表に露出している根っこのある基盤なのか、または転石だろうか?といったことが気になりだした。何度かロープを頼りに川底に降りて、巨石の付け根を調べてみたが、はっきりとせず、どちらとも言えないままであった。言い忘れたが、岩石はチャートである。



写真2 上流から見た縊岩

いずれにしても、この巨石の存在は谷地形に大きな影響を与えているようである。すなわち、写真2や写真3にみるように、その上流側は堆積の場であり、堆積物が覆って緩やかな地形をなし、下流側は写真4にみるように、浸食の場であって、河床には基盤の露頭もみられる。



写真3 縊岩より上流側の地形

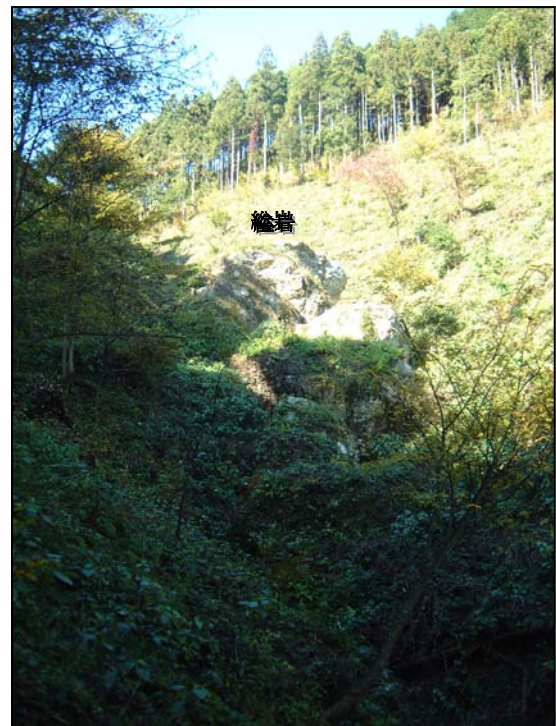


写真4 縊岩より下流側の地形

ここで注目すべき点は、上流側の堆積物である。写真5にあるように、灰色の粘性土が結構厚く堆積している。これはグライ(gley)土壌と呼ばれているものに相当し、湛水または排水不良により酸素が欠乏し、土壌が還元される環境で生成したものである。土壌が灰色ないし、青色をしているのは二価鉄やマンガンなどが生成しているためである。地下水位が高く、その変動が少ない谷底や窪地などに広く分布するとされている。

つまりこの場所は、かつて湿地帯あるいは、それに近い状態にあったことが類推される。



写真 5 縊岩上流の谷底を埋めているグライ化した土壌

以上に述べてきたように、縊岩の存在がこのような土壌の形成に関係しているのは、間違いなく、その縊岩は転石以外には考えられない。基盤岩だとしたら、谷はそれを避けてつくられた筈だからである。

図 1 をもう一度見てもらいたい。図の下のほうに金毘羅山とある。粗末だが神社も建っている（写真 6）。山の高さは 450m ほどであるが、あきる野台地から立川方面までの眺望が楽しめる。



写真 6 金毘羅神社

神社の裏手に、ご神体と思われる高さ 6m ほどの巨石が屹立しており（写真 7）、そのまわりは崖になっている。位置関係からみて、この裏手に縊岩の故里があるものと推測していたが、研究期間中はこの“神域”に入ることを控えていた。

つい最近になって、ようやく裏手の尾根伝いにご神体の裏側に近付き、写真 8 のような岩塊群を目にすることが出来た。

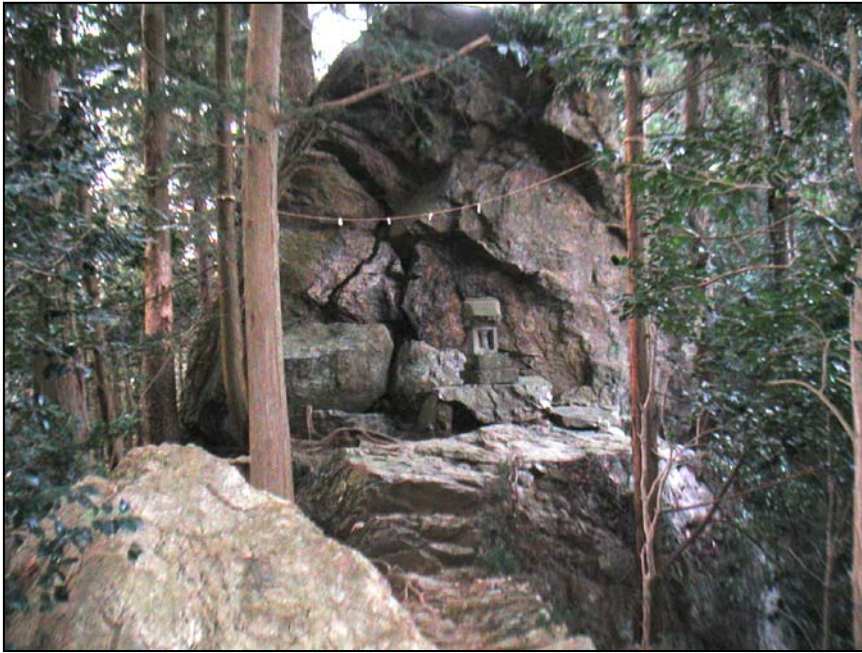


写真7 金毘羅神社の裏手にあるご神体

岩塊はすべてチャートで、縊岩と同じものである。その位置は金毘羅山から北西方向に張り出している尾根上にある。

縊岩はこの場所の直下といってもよいところにあり、大地震などの折にこの尾根から崩れ落ちたものと考えるのが理に即しているように思われる。



写真8 金毘羅山裏尾根の岩塊群



写真9 樽沢下流の巨石

確かに、樽沢の谷底にみる巨石は、ひとり縊岩だけではなく、写真9のように他にもみられ、これでも高さは3m以上ある。これもやはり尾根部から転がり落ちてきたものであろう。

さて、これでおわりとなると、何やら尻切れになりそうである。そこで図3を見ていただきたい。これは真冬の気温零下という厳寒の折に、測定した樽沢の水温分布である。縊岩を挟んで上流側と下流側で大きなギャップが認められる。縊岩は天然の地下ダム役割を演じていて、ここで一旦地下水を滞留させ、東からさしこむ日射によって暖められた地下水が水流の源になっているためであろう。滞留時間に関する電気伝導度においても、図4にみるようにその差は歴然である。

縊岩の存在は流域の水循環をも支配していたわけである。

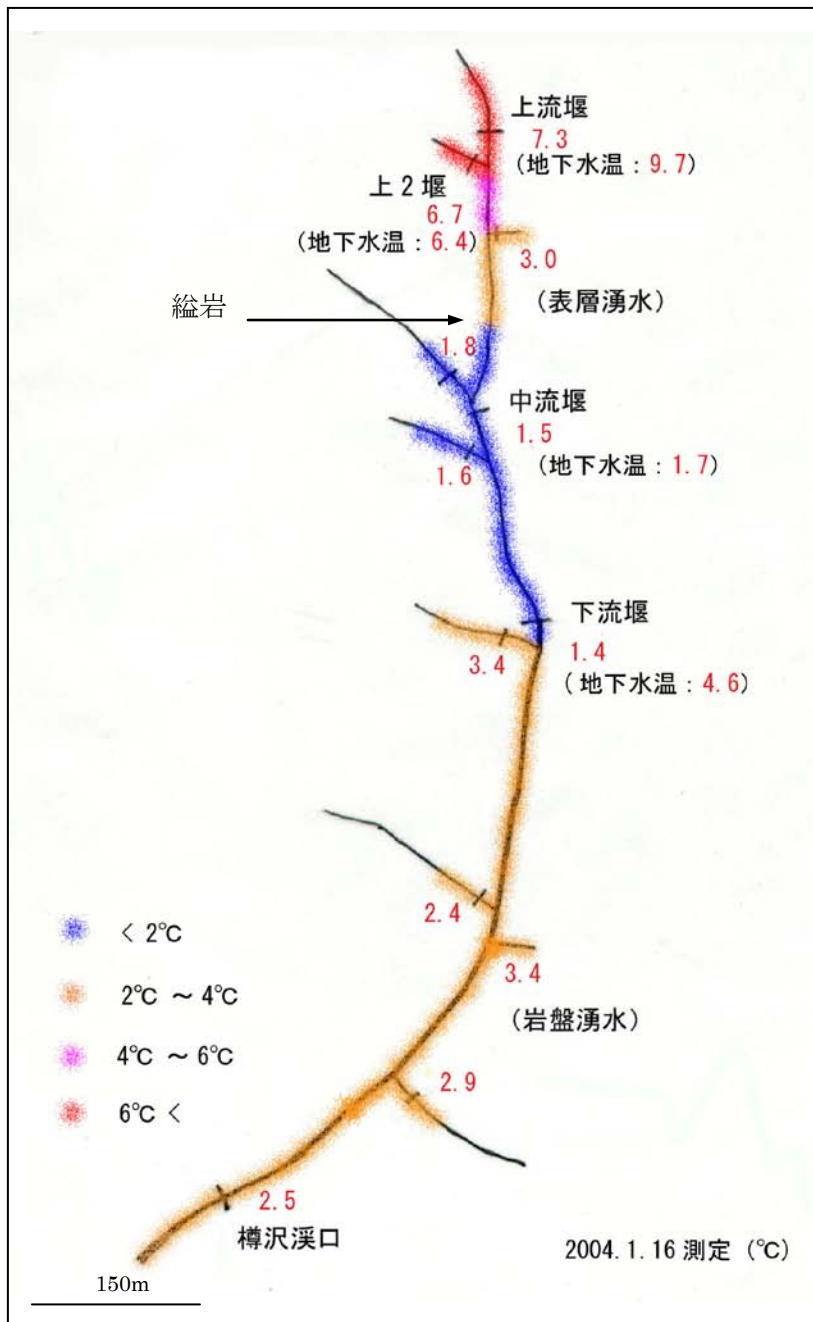


図3 樽沢の水温

(気温：マイナス2.6度，午前8時，アメダス，八王子)

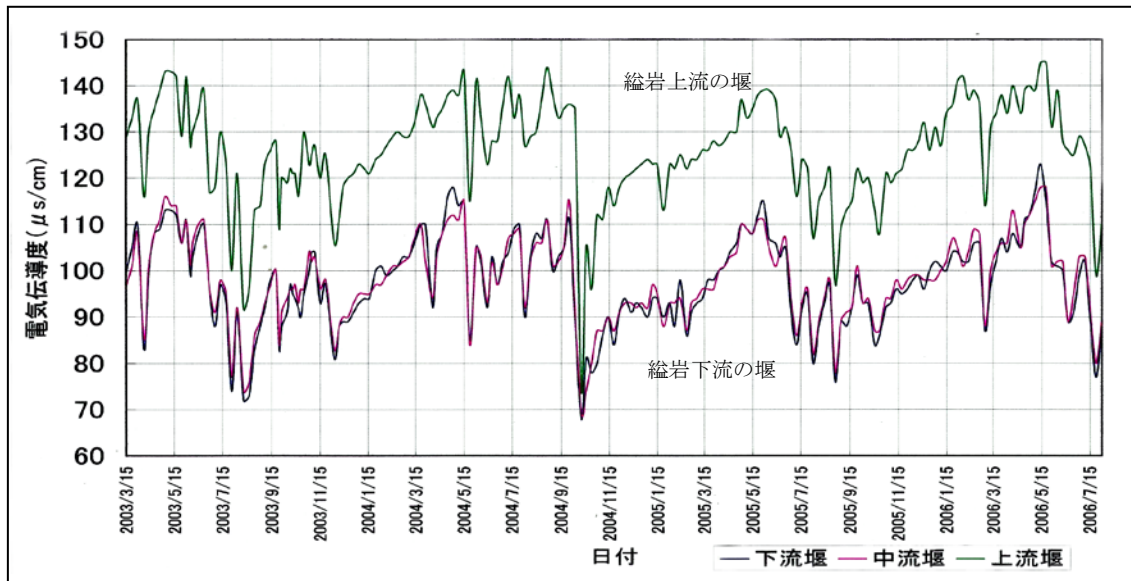


図 4 各堰の電気伝導度の経時変化

(堰の位置は図 3 参照)

ところで、この樽沢は沢ガニの生息地として有名らしく、これを獲りに来る人をよく見かける。昔から山里の人たちがカルシウム源として、食してきたのだろうか。唐揚げや佃煮にしたりすると結構いける。この谷では水温が低く、水質の良い絵岩から下流側で多く収穫できるそうである。

こういったようなところにも、ランドマークとしての絵岩の意味が感じられる。